

『狭衣物語』 作中歌の背景（一）

後藤，康文
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10409>

出版情報：文献探究. 22, pp.20-31, 1988-09-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『狭衣物語』作中歌の背景

(一)

後藤 康又

藤原定家によって賞揚され、後代の和歌にも大きな影響を与えた『狭衣物語』作中歌の背景には、いったいどのような先行歌が潜んでいるのだろうか。本稿は、このことを極力説明すべく、巻一の歌についておこなった調査の報告であるが、その際、措辞もしくは情意の点で『狭衣物語』作者が明らかに依拠したと考えられる歌(本歌)はもちろん、影響を及ぼした可能性をうかがわせる歌や類似した表現を持つ歌(参考歌)まで含めて、やや広く検出するように心がけた。ただし、特別関わりのある先行歌の見出せないものはこれを割愛したほか、今日までの『狭衣物語』諸注等の指摘で十分尽くされていると思われるものについても、改めて扱うことはしなかった。

* * *

いかにせんいはぬ色なる花なれば	古一
心のうちをしる人ぞなき	深一
※：人ほご(深か)・人ほし(内か)・人のなき(深か)	内一

「くちなしにしも咲きそめけん契りこそくちをしけれ。心の
中いかに苦しかるらん」とのたまへば、中納言の君、「さる
は、言の葉は多くはべるものを」と言ふ。
いかにせんいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人ぞなき

と思ひつづけられたまへど、げに人もしらざりけり。

(全書・一八六頁)

義妹源氏の宮への(へいはで思ふ)恋の懊悩を、晩春の山吹の花に託して詠出したこの狭衣の歌は、二百余首に及ぶ『狭衣物語』作中歌の最初の一首であるが、この歌が二首の先行歌に基づいて形づくられていることを、ここでは明らかにしておきたい。

『実方集』(I・II・III、『円融院御集』)には、次のとき一連の贈答歌が収められている。

堀川の院にて、御屏風のうしろに、小馬の命婦のみたるに、かみから山吹の花を投げとらせたまへるに、うへの
おはしますと心えて、
a 八重ながら色もかはらぬ山吹の九重になど咲かずなりにし
御かへし、

b 九重にあらで八重咲く山吹のいはぬ色をばしる人もなし
また、御かへり、
c 衛士がゐし火たきに見ゆる花なれば心の中にいはで思ふかも
うへの御、

d 御垣よりほかの火たきの花なれば心とどめて折る人もなし
a・cは実方の詠、b・dは円融院の御製であり、a・bは後に『新古今集』に(二四〇・二四一)、またc・dは『万代集』・『夫木抄』に(六三〇・六三六)採られている。もはや多言を要さないが、右のうち、狭衣詠の形成に直接関与している

のはb・cの両歌であり、前者の下の句と後者の第三・第四句を巧みに繋ぎあわせ、はじめに「いかにせん」と置くことによつて、件の一首はできあがるという寸法である。

これら『実方集』の贈答歌は、資料によつて詞書等の異同もあり、なかなか難解であるが(注)、『狭衣物語』作者は、「言の葉は多くはべる」山吹を詠じた歌の中から先の二首に着目し、『狭衣物語』冒頭部を飾る主人公狭衣の心中詠創作の素材としたのであろう。なお、「いかにせん」の歌のあと、物語の叙述は、

母屋の柱に寄りゐたまへる御かたちぞ、なはたくひなく見え
たまふに、よしなしごとにより、さばかりめでたき御身を、
「室の八島の煙ならでは」とおぼしこがるるさまぞ、いと心
苦しきや。(全書・一八六頁)

という部分へと流れこんでゆくが、ここでの引歌表現「忍ぶもちずり」とともに、後に狭衣の源氏の宮に対する思いを象徴する重要な歌語(キーワード)となる「室の八島」の典拠が、やはり実方の詠(『詞花集』一八六)に拠るものである点も注目される。

うきしづみねのみなかるるあやめ草
かかるとこひちと人もしらぬに
古二
深・内二

これは、五月四日夕、暮清引く賤の男に託して自らの忍ぶ恋の苦悩を吐露した狭衣の独詠であるが、目下のところ、特別本歌と思われる先行歌は見あたらない。ここでは参考までに、次の三首を掲げるととどめたい。『伊勢集』二四(『続古今集』五三)。

うきしづみ淵瀬ながるるもみち葉は深く浅くそ色も見えける
『実方集』二五(『続古今集』一六〇)。

あはぬまのみぎはにおふるあやめ草ねのみなかるるきのふけ
ふかな

『金葉集』三〇の小一条院の作、

しらざりつ袖のみぬれてあやめ草かかるとこひちにおひむもの
とは

しらぬまのあやめはそれと見えずとも
よもぎがもとはすぎずもあらなん
古三
深三
内三

五月四日、内裏からの帰途にあつた狭衣に某女(後に中務宮家小宰相と判明)が宛てた歌。この歌に先立つ散文部分(全書・二五頁)が、『源氏物語』夕顔巻巻頭の描写に似ている点は、すでに指摘のあるところだが(全書・集成等)、「しらぬまの」の歌も、やはり夕顔巻の夕顔の詠、

心あてにそれかとぞ見るしらつゆの光そへたる夕顔の花
を意識して作られたものと見るべきであろう。この両首は、定家の「物語白番歌合」において左右につがえられており(十番)、樋口芳麻呂氏の卓論「源氏狭衣白番歌合の配列について」(注三)では、双方の共通点が次のように整理されている。

ア通りすがりの男主人公を見て女性が贈った歌である。
イともに男主人公が中将であつた時代の話である。
ウ歌に夏の植物(左歌は「ゆふがほ」、右歌は「あやめ」)がよみ込まれている。

工「それかとぞ見る」（左歌）、「それと見えず」（右歌）の類似した表現が見出される。

思ひつつ岩垣沼のあやめ草
みこもりながらくちはてねとや
※みこもりながらくちはてねとや（古）みこもりながらくちはてねとや（内八）

古六
深六
内六

一条院の姫宮（後の一品宮）に宛てたこの狭衣の歌には、「天喜三年（一〇五）五月三日六条齋院物語歌合」において詠まれた小弁の作（『後拾遺集』八五）

引きすつる岩垣沼のあやめ草思ひしらずもけふにあふかなが影響を与えているであろう。同歌台時に詠進された歌の影響は、『狭衣物語』のほかの作中歌においても認められる節がある（「そのはらと」の歌参照）。参考歌としては他に、『伊勢大輔集』六の思ひつつせかれければや山水の岩垣沼に下よとみつる

『拾遺集』六（『古今八帖』一六二）の、奥山の岩垣沼のみこもりに恋ひやわたらんあふよしをなみ
『後撰集』八〇（『古今八帖』二五七・『朝忠集』九）の、池水のいひいづることのかたければみこもりながら年を経にける
などを指摘できる。

いなづまの光にゆかん天の原
はるかにわたせ雲のかけし

古八
深・内八

五月五日の夜、宮中にて横笛を吹奏した折の狭衣の歌。この歌の背景にはまず、『拾遺集』三四（『和泉式部集』二五）の、

暗きより暗き道にぞいりぬべきはるかに照らせ山の端の月
が確実存在するであろう。この和泉式部の名歌は、『狭衣物語』巻三の飛鳥井女君の遺詠、

暗きより暗きにまどふ死出の山とふにぞかかる光をも見る
にも踏まえられているのである。

そのほかではたとえば、『道信集』一（『後拾遺集』九六）の、
天の原はるかにわたる月だにもいづるは人にしらせこそすれ
や、『後拾遺集』九六の源経任の作、

かぎりあれば天の羽衣ぬぎかへておりそわずらふ雲のかけは
し

なども、『狭衣物語』作者の脳裏にあった可能性がある。後者の方は、先の狭衣詠の次（深川本等では二首目）にくる帝の御製、

みのしろもわれぬぎきせんかへしつと思ひなわびそ天の羽衣
との関連からも興味深い。詠主経任の没年は長元二年（一〇五）とされる（『勅撰作者部類』）。

夜もすがらなげきあかして時鳥
なくねをだにもきく人もがな

※夜もすがらなげきあかして時鳥（深ナシ）
なくねをだにもきく人もがな（内ナシ）

古一二
深ナシ
内ナシ

天稚御子降下から一夜明けての狭衣の独詠である。この歌の背景としては、『伊勢集』（一）の隣あう二首（三七・二七）、うち前者は『拾遺集』九）、

山里に宿らざりせば時鳥きく人もなきねをやながまし

夜もすがらもの思ふときのつらづるはかひなたゆきもしらず
ぞありける

に注目してみたい。これらを素材にひと工夫するならば、狭衣の歌
が導けるのではなからうか。なお、後者は、『狭衣物語』別系統（
深川本等）の同じ箇所（別系統）

夜もすがらものや思ふと（あき忠）時鳥大の岩戸をあけがた
になく

とも何か関わりがあるのだろうか。

そのほかに、『拾遺集』二〇三（『和漢朗詠集』七五）の実方の詠、
あしひきの山がくれなる時鳥きく人もなきねをのみぞなく
もある。

時鳥なくにつけてぞ頼まるる
かたらふ声はそれならねども

古ナシ
深・内一四

これは、深川本グループにのみ存する歌のようである。したがっ
て、オリジナルか否かということも問題になるが、今その点は不問
に付しておきたい。

さて、この狭衣詠を考える上で、気になる歌がひとつある。それ
は、『源氏物語』花散里巻に見える中川の女の詠で、青表紙本系統
諸本のうち、定家自筆本・大島本によれば、

時鳥こととふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨の空

三条西家本では、

時鳥かたらふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨の空

とある歌である。河内本系統・別本系統ともに、この歌の第二句は
「こととふ声」のようであり（以上『源氏物語大成』校異篇）、こ

ちらが元の形なのかもしれないが、三条西家本系の歌本文と先の狭
衣詠との間には、あるいは繋がりがあられるのかもしれない。

よしさらば昔の跡をたづねみよ

われのみまよふ恋の道かは

※ま…まよ（深な）

古一三
深一五
内一五

「いと書きほどに、いかなる御文御覧するぞ」と聞こえたま
へば、「齋院より絵とも賜はせたる」とて、くまなき日のけ
しきにはなばなと匂ひみちたまへる御顔つきを、まばゆげに
おぼして、少しうちあかみてこの御文にまぎらはしたまへる
よういけしきまみなど、言ひつくすべうもあらずめでたう見
えたまふに、涙さへ落ちぬべうおぼえたまふまぎらはしに、
この絵どもを見たまへば、「在五中将の日記をいとめでたう
かきたるなりけり」と見るに、あいなうひとつ心なる心地し
て、目とどまるところどころ多かるに、え忍びたまはで、「こ
はいかが御覧する」とてさし寄せたまふまに、

よしさらば昔の跡をたづねみよわれのみまよふ恋の道か
は

とも言ひやらす、涙のほろほろとこぼるるをだに「あやし」と
とおぼすに、御手をさへとらへて、袖のしがらみせきやらぬ
けしきなるに、宮いとあさまじうおそろしうなりたまひて、
やがてとらへたまへる御かひなに、うつふし臥したまひぬる
けしきの、言ひしらぬものにとらへられたらむやうにおぼし
たるも、いとど心さわぎして、こころ思ひあつむる心のうち
をかたはしだにもうち出づるべうもなく、涙にのみおぼほれ

たまへり。

(全書・二二三頁)

狂言の一日、源氏の宮のもとを訪れた狭衣は、折しも彼女の見入っていた物語絵の中に「在五中将の日記」があるのを見つけ、「あいなうひとつ心なる心地して」、それまで人知れず忍んできた源氏の宮への恋の思いを、ついに打ちあけてしまふ。「よしさらば」の歌はいわばその第一声であるが、この歌の背景を考える時、せひとも引いておかねばならないのは、『源氏物語』巻の次の一節である。

「さてかかる古ごとの中に、まろがやうに実法なる痴れ者の物語はありや。いみじくけ遠きものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおほめきしたるは世にあらじな。いさ、たぐひなき物語にして、世に伝へさせん」と、さし寄りて聞こえたまへば、顔をひきいれて、「さらずとも、かくめづらかなることは、世語りにこそはなりはべりぬべかめれ」とのたまへば、「めづらかにやおほえたまふ。げにこそまたなき心地すれ」とて寄るたまへるさま、いとあされたり。

思ひあまり昔の跡をたづぬれど親にそむける子ぞたくひなき

不孝なるは、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ」とのたまへど、顔ももたげたまはねば、御髪をかきやりつつ、いみじく恨みたまへば、からうじて、

古き跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は

と聞こえたまふも、心恥つかしければ、いといたくも乱れたまはず。かくしていかなるべき御ありさまならむ。

(全集(3)・二五二頁)

有名な〈物語論〉の直後の情景である。物語にかこつけて意中を吐露する場面そのものの類似もさることながら、狭衣の歌の「昔の

跡をたづねみよ」は、光源氏の歌の「昔の跡をたづぬれど」に拠った措辞であると認める必要がある。このことは、後に、

源氏の宮は、古き跡たづねたまへりしうち、さやかにも見あはせたまはず、ことのほかなる御けしきを、「さればよ」とつらく心憂きに、… (全書・二二六頁)

という件りの存在することによって証明される。右の引用本文中にいう「古き跡たづねたまへりし」折とは、すなわち、初めに提示した巻一の場面を指すのであるが、この表現自体は、狭衣の歌の「昔の跡をたづねみよ」を承けているわけではなく、先に掲げた玉鬘の答歌の初二句「古き跡をたづぬれどげに」を踏んでいると考えられるからである。

狭衣が義妹源氏の宮に初めて意中をうちあける一場は、『伊勢物語』四十九段や、『源氏物語』総角巻で匂宮がその姉女一の宮に戯れかかる場面(全集(5)・二五二・二五三頁)を基底に形成されたものとの指摘が従来ある。それは一読して自ら明らかどころでもあるが、作中歌の分析からはさらに、先の巻巻の一条をも念頭に置いて筆を運んでいた『狭衣物語』作者の姿が浮かびあがってくるのである(注三)。義理の娘玉鬘に恋心をいだく光源氏の姿は、『狭衣物語』冒頭の春の夕映えの情景にも色濃く影を落としていたが(注四)、ここにおいてもまた、狭衣と源氏の宮との関わりの上に、光源氏と玉鬘の心象が揺曳しているわけである。

ほかさまに薬塩の煙なびかめや
浦風あらく波はよるとも

※こしほけや(古・内巻)……ほけや(注四)

古一五
深一七

内一七

女二の宮の降嫁を積極的に望むよう父堀川大臣に奨められたあとで、狭衣は源氏の宮以外の女性を思わぬ決意をあらたにする。この歌の第二句が本来「藻塩の煙」であったか「塩焼く煙」であったかは、にわかに決しがたいが、いずれにせよ、その根底にある歌が、『古今集』七八の、

須磨の海士の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり
であることはいうまでもない。

ところで、これとは別に、もう一首注意したい歌がある。

浦にたく藻塩の煙なびかめや四方の方より風は吹くとも

この歌は、『惟成弁集』に見え(三)、『新古今集』にも撰入されている(三六)が、狭衣の歌と比較してみると、第二・第三句が全く一致しているほか、下の句のつくりも同工であるなど、大変に近似しており、両者の密接な関係がうかがわれる。全書は、これを参考歌として挙げてはいるが、形式の面からは、この歌を直接の本歌と認定してよいのではなからうか。

声たててなかなぬばかりぞもの思ふ
身はうつせみにおとりやはする

古二〇
深・内二三

小さき几帳に宮はまぎれ入りたまひぬれば、すさまじくて、端つ方に人々と物語りしたまふに、御前の木立木暗くあつかはしげなる中に、蟬のあやにくになきいでたるを見出したまうて、

声たててなかなぬばかりぞもの思ふ身はうつせみにおとり
やはする

など□すさびに言ひまぎらはして、「蟬黄葉にないて漢宮秋

なり」と、忍びやかにうち誦したまふ御声、めづらしげなきことなれど、若き人々は死にかへりめでたしと思ひたる、ことわりなり。(全書・二六・三五頁)

この場面は、『宇津保物語』藤原の君巻で貴宮を奔慕する彈正宮忠康の描写を模倣したものとわかれており(全書・集成)、狭衣の独詠についても諸注(大系・集成)は、『好忠集』三八の、

虫のねぞ草むらことにすだくなるわれもこの夜はなかなぬばかりぞ

を類例としてかかっている。

参考歌という点ではさらに、『拾遺集』四九の、

恋ひわびぬねをだになかむ声たてていつこなるらむ音無の里
同(二四)の、

声たててなくといふとも時鳥たもとはぬれじそらねなりけり
『後撰集』三三(『古今六帖』三六)の、

声たててなきぞしぬべき秋山に友まとはせる鹿にはあらねど
あたりまで考えてみてよいかもしれないが、一首全体の発想及び結構がよく似た先行歌としては、次の『後撰集』四五の歌を指摘しておかねばなるまい。

降る雪にももの思ふわが身おとらめやつもりつもりて消えぬばかりぞ

この歌の「降る雪」を「うつせみ」に、「つもりつもりて消えぬ」を「声たててなかなぬ」に変え、残る部分を適当に調整して並べ換えるならば、すなわち狭衣の詠が誕生するわけであり、この『後撰集』歌が『狭衣物語』歌の本歌であった可能性は、かなり高いもののように思われる。

吉野川なにかはわたる妹背山
人だのめなる名のみながれて
※ささぎ(彦)か…ささぎ(集)

古二三
深二五
内二五

今姫君母代の歌。その下の句には、『古今集』三〇五(『古今六帖』三〇四)の貫之の作、

かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

が踏まえられている。流布本系本文の結句「なみのながれて」は、「なのみながれて」の誤りと判断すべきであろう。なお、右の貫之歌は、卷三の飛鳥井女君の遺詠、

たのめこしいづら常磐の森やこれ人だのめなる名にこそありけれ

においても、下の句全体がそのまま用いられている。

右以外の先行歌ではもう一首、同じ『古今集』八六(『古今六帖』三〇九)の、

ながれては妹背の山の中におつる吉野の滝のよしや世の中も挙げておいてよいだろう。

うらむるに浅さぞまさる吉野川
深き心はくみてしらなん
※ささぎ(彦)か…ささぎ(集) 5…ささぎ(彦)か

古二四
深二六
内二六

今姫君母代に応えた狭衣の歌。特別関わりの深い歌はない模様であるが、『新撰和歌』三〇四の、

浅き瀬を波はたつらむ吉野川深き心を君はしらすや
『海人手古良集』四〇の、

あづまの浜名の橋のはやくより深き心はくみてしらん
などは参考となろうか。

わたらん水まさりなば飛鳥川
あすは淵瀬となりもこそすれ
※ささぎ(彦)か…ささぎ(集)

古二九
深三一
内三一

狭衣の、

飛鳥川あすわたらむと思ふにもけふのひるまはなほぞ恋しき
という歌に対するこの飛鳥井女君の返歌が、『古今集』三三〇の、

世の中はなにか常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる
を踏まえていることは、改めて述べるまでもないであろう。しかし、それ以外にも注意してみたい歌はある。

まず、やはり『古今集』八六の小野篁の歌、

なく涙雨とふらなむわたり川水まさりなばかへりくるがに
が、飛鳥井女君詠の上の句に影響を与えているのではないかと思わ
せるほか、『後撰集』二〇四・二〇五の贈答歌、

つくしなる思ひそめ川わたりなば水やまさらんよとむときな
く

わたりてはあだになるてふ染川の心づくしになりもこそすれ
も、何らかの関わりを想像させる。また、第三・第四句の措辞に関
しては、「応和三年宰相中将君逢春歌合」五の、

天の川あすは浅瀬になればこそたなばたつめも霧わたるらめ
が参考となろうか。

かちをたえ命もたゆとしらせばや
涙の海にしづむ舟人

古三二
深・内三四

筑紫へと向かう船中で詠まれたこの飛鳥井女君の歌には、自らの前途への絶望と、狭衣への思慕ゆえの痛哭がこめられているが、そこに『好忠集』四〇の、

由良の門をわたる舟人かちをたえ行方もしらぬ恋の道かな
が踏まえられていることは、一見して明らかである。これは、後に『新古今集』(二〇三)や『百人一首』にも撰ばれた名歌であり、飛鳥井女君詠の直前にあたる散文部分、

この扇を取りて見れば、ただ一夜もたまへりしなりけり。移り香のなつかしきは、うちかはしたまへりし匂ひもかはらで、真名仮名など書きませたまへるを見れば、「わたる舟人かちをたえ」など、かえすがえす書かれたるは、「その折はわれとしりて書きたまへるにはあらじなれど、ただ今わが見つけたるは、ことしもこそあれ」と、いかで悲しとおぼえざらむ。

(全書・二七〇頁)

においても、引歌として用いられている。けれども、この一首のみが本歌というわけではなく、同じ『好忠集』の別の一首(四四)、

人恋ふる涙の海にしづみつ水の泡とぞ思ひ消えぬる

も、飛鳥井女君詠の形成に確かに関わっているようである。『狭衣物語』作者は「かちをたえ」の歌を作るにあたって、好忠の遺した二首の詠作を巧みに合成したのであった。

そへてける扇の風をしるべにて
かへる波にや身をたぐへまし

古三三
深・内三五

この飛鳥井女君の心中詠については、全書が、『源氏物語』明石巻の明石の君の歌、

年経つる若屋も荒れてうき波のかへる方にや身をたぐへまし
を参考歌のひとつとして挙げているが、右の歌の下の句の表現は、飛鳥井女君詠に明らかに取られていると判断してよいだろう。そして、同歌の初二句には、『後撰集』二三〇の、

そへてやる扇の風し心あらばわが思ふ人の手をなはなれそ
が関係しているように思われる。

しきたへの枕もうきてながれぬる
君なき床の秋のねぎめに
※まきら(直が)……まきら(集)……なれる(深が) 4ま(直が)……いも(後が)

古三五
深・内三七

悲愴いやます秋、飛鳥井女君のことが「恋しく思ひ出でられたまひて、夜もまどろまれたまはし」(全書・三四頁)ぬ狭衣の独詠。この歌は、『拾遺集』三五(『元輔集』二二・『後拾遺集』八〇)の、

思ひきや秋の夜風の寒けきに妹なき床にひとり寝むとは

を本歌としている。これは、太宰大式藤原国章が妻を亡くした折しも「秋風の夜寒むなる」(『後拾遺集』詞書)時分に詠まれた歌で、言葉の面のみならず、情意においても狭衣詠に通じるものである。

そのほかでは、『拾遺集』二五の、

涙川水まさればやしきたへの枕のうきてとまらざるらん

や、『古今六帖』三四〇の、

人恋ひて寝る春の夜はしきたへの枕ねさめにながれいでぬべし
なども影響していようか。

そのはらと人もこそきけ帚木の
などか伏屋におひはじめけん

古二六
深・内三八

失跡した飛鳥井女君の懐妊を氣遣い、その子が「伏屋にやおひいでむ」と「心にかかりて、わが御宿世のほどをくちをしよう」（全書・三四頁）思う狭衣の独詠。この歌が、『古今六帖』三二九（『新古今集』九七）の、

そのはらや伏屋におふる帚木のありとてゆけどあはぬ君かなに依拠していることは、諸注の指摘するとおりであるが、「伏屋におふる」ことが狭衣の歌にあつて出自の賤しさを寓している点については、同じく右の先行歌を踏まえた『源氏物語』帚木巻の空蟬の詠、

数ならぬ伏屋におふる名のうきにあるにもあらず消ゆる帚木を媒介として想定する必要がある。また、狭衣の歌の下の句の表現には、「天喜三年五月三日六条高院物語歌合」における左門の詠作、

あやめ草あやめもしらぬつまなれとどかこひちにおひはじめけん

が影響しているのではないかと考えられる。

夕ぐれの露吹きむすぶ木枯らしや
身にしむ秋の恋のつまなる

古三八
深・内四〇

飛鳥井女君を追想するこの狭衣の独詠について、土岐武治氏は、宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれという『源氏物語』桐壺巻の歌を挙げたうえで、「狭衣の歌は、歌詞の上から、趣向の上から見ても、この『宮城野の』の歌に依つての作ではなからうかと思はれる」とする（送）。これに対して、全書は、同じ『源氏物語』蜻蛉巻の蕪の詠、

萩の葉に露吹きむすぶ秋風もゆふべぞわきて身にはしみけるを参考歌としているのだが、桐壺巻の歌―それは当然作者の脳裏に浮かんでいたではあろうが―と比べて蜻蛉巻の歌の方が、狭衣詠の背景としては、より一層の重みを持つていようように思われる。

そのほか、『順集』二五（『続古今集』三五）の、

浅茅生の露吹きむすぶ木枯らしにみだれてもなく虫の声かなも、『狭衣物語』作者の念頭にあつた歌であろう。第二・第三句の措辞が相重なつてい上に、初句と結句とは、狭衣の歌の直前の情景、「この秋は虫のねしげき浅茅原にことならず」（全書・二五頁）云々に合致する（送）。また、この歌は「天禄三年八月規子内親王前裁歌合」における但馬君の作であるが、同歌合のほかの詠作に依拠した歌が『狭衣物語』巻三にもあり（送）、この点からも、『狭衣物語』作者は、この有名な歌合の作品をよく知っていたものと考えられる。

ながれてもあふ瀬ありやと身を投げて
中明の瀬戸にまちこころみん

古三九
深・内四一

卷一も終わり近く、中明の瀬戸で遣された飛鳥井女君の歌。この歌の背景には、『古今集』七七（『伊勢物語』四十七段）の業平の作、

大幣と名にこそたてれながれてもつひに寄る瀬はありといふ
ものを

があるのではなからうか。内容面での関連は希薄だが、これが大変広く知られた歌であることや、措辞上の共通性などからして、その可能性はあるように思われる。また、措辞の点では、『朝忠集』六一（『新勅撰集』二〇七）の、

ながれての名にこそありけれわたり川あふ瀬ありやとたのみ
けるかな

を、参考までに掲げておきたい。

早き瀬の底の藻屑となりనికిと

扇の風よ吹きもつたへよ

※さき（古）…み（深）

古四〇
深四二
内四三

飛鳥井女君の悲痛な思いを湛えたこの一首を最後に、『狭衣物語』卷一はほとんど閉じられる。この詠に影響を与えた可能性のある歌としては、『拾遺集』八七の順の作、

涙川底の水屑となりはてて恋しき瀬々にながれこそすれ

や、『道信集』二元の、

人めなるそらものいみはかたくとも扇の風は吹きもあけなん
などが指摘でき、両首とも『狭衣物語』作者の目にはいつていたはずであるが、さらに確実に踏まえられたと思われるのは、『和泉式部集』四三の、

待ちわびて行方もしらすなりにきと君来てとはばとくてこた
へよ
という歌である。

この作は、飛鳥井女君の詠と骨組みを同じくするほか、内容においても繋がりが考えられ、さらには、下の句の表現が飛鳥井女君の別の一首、

天の戸をやすらひにこそいでしかと木綿つけ鳥よとはばこた
へよ
の結句に投影していると思われる点でも看過できない。

なお、「早き瀬」という言葉の出所は、この歌のひとつ前の飛鳥井女君詠の第三句「身を投げて」とあわせて、『源氏物語』手習巻の浮舟の詠、

身を投げし涙の川の早き瀬をしがらみかけてたれかどめし
に求めることができるだろう。入水に至る飛鳥井女君の造型には、浮舟の影響が大きい。作中歌の言葉の面からそれが裏打ちされる一例といえよう（注）。

そのほか、

うきにのみしつむ水屑となりはてて
けふはあやめのねだになかれず
古七
深・内七

は、『拾遺集』八七の順の歌、

涙川底の水層となりはてて恋しき瀬々にながれこそすれ
を（「早き瀬の」の歌参照）

九重の雲のうへまでのぼりなほ
天つ空をば形見とは見ん
古ナシ
深・内九

は、『後拾遺集』五三（『大鏡』・『栄花物語』等にも）の花山院
の御製、

旅の空夜半の煙とのぼりなほあまの藻塩火たくかみや見ん
を、

紫の身のしろ衣それならば
乙女の袖にまさりこそせめ
古一〇
深・内一

は、『古今集』空三（『古今六帖』三五五）の、
を、
恋しくは下にを思へ紫のねずりの衣色にいつなゆめ

花かつみかつ見るだにもあるものを
安積の沼に水やたえなん
古二二
深・内二三

は、諸注の指摘する『古今集』空三の、
陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらん
以外に、あるいは『信明集』二六（『後拾遺集』八三）の、

花かつみかつ見る人の心さへ安積の沼になるぞわびしき
を、

あひ見ては袖ぬれまさる小夜衣
ひと夜ばかりもへだてずもがな
古二五
深二七
内二七

は、『伊勢集』二四の、

山川に声きくよりはくれなるのひとめばかりもあひ見てしが
を、
な

夜な夜なをへだてまさらば小夜衣
身さへうきてもながるべきかな
古ナシ
深六b
内二八

は、『元真集』四の、

あはでふるほどにぬれたる唐衣けふは身さへもながるべきか
を、
な

行方なく身こそなりなめこの世をば
跡なき水をたづねても見よ
古二七
深一九
内一九

は、『後撰集』三三九（『伊勢集』三三）の伊勢の歌、

待ちわびて恋しくならばたづぬべく跡なき水の上ならでゆけ
を、それぞれ念頭に置いて作られたものであろうか。

注

(一) 『新古今集』諸注のほか、伊井春樹「小馬命婦の晩年―公任集覽え書き―」(愛媛国文と教育、昭五五・七)、安藤太郎他「円融院御集試

解(一)―」(東京成徳短期大学紀要 第十六号、昭五八・三)参照。

(二) 文学・語学 第五十七号、昭四五・九↓「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」(昭五七、ひたく書房)

(三) 森下純昭「狭衣物語の贈答歌―その変則性について―」(国語国文学、昭五一・二)・土岐武治著「狭衣物語の研究」(昭五七、風間書房)は、胡蝶巻からの影響を説く。

(四) 胡蝶巻。なお、真木柱巻で光源氏が玉鬘をしのぶ一節、

三月になりて、六条殿の御前の藤山吹のおもしろき夕映えを見たまふにつけても、まつ見るかひありてゐたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうちすてて、こなたに渡りて御覧す。呉竹の籬に、わざとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。「色に衣を」などのたまひて、

思はずに井手のなか道へたつともいはでそ恋ふる山吹の花
顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。(全集③・三八五頁)
も注意される。

(五) 前掲注二書、二七六頁。

(六) ただし、この部分の直接の引歌は、桐壺巻に見える、
いとどしく虫のねしげき淺茅生に露おきそふる雲のうへ人
である。

(七) 狭衣の歌、

をれかへりおきふしわふる下萩の末越す風を人のとへかし

とこれに対する女二の宮の実質上の返歌、

うき身には秋もしらるる(身にしみて秋はしりにき)萩原や末越す
風の音ならねども

特に後者は、この歌合の、

萩の葉の末越す風の音よりそ秋のふけゆくほどはしらるる
を踏まえて詠まれている。

(八) 土岐武治氏は、『源氏物語』浮舟巻の浮舟の詠、

鐘の音のたゆるひびきにねをそへてわが世つきぬと君につたへよ

と「狭衣物語」「早き瀬の」の歌とのあいだに「たゞならぬ因縁が續はれる」とする(前掲注二書、四二二頁)。

―九州大学大学院博士課程―